

2022年2月2日(水) 晴

大阪市内は今のところよく晴れている。昨夜少し雨がふり、空が澄んでいる。昨日は旧暦の元旦、新旧ともに迎春。明後日は立春。

－ 早春にアートな時間 －

先週のうちに背のある観葉植物を入れ、机回りの配置を変え、迎春準備を済ませて迎えた昨日旧元旦、むかえる立春。日の出時間も少しはやくなり、陽ざしもなんとなく春めいて、いざ新しい年が動き出す!という

そういえば今日は「中之島美術館」のオープン日です。直近になって広報された印象、全然知りませんでした。構想から40年とかで、ようやく所蔵品の名作が一般の目にふれます。建物もユニークな造りのようで、立地も中之島ですから、ロケーションがいい。

絵をみる気分の時は、その場へいくまでの風景も大事。だから京都へ足がむいたものです、インバウンドで京都に人にあるれるまでは。絵をみて、歩いて、まさに哲学の道がそこここにある。

2月、3月は旧年度から新年度への狭間の期間。締めくくりの仕事をしつつ、新しいテーマにも頭をむける。いろいろ思考をめぐらし、思案する時期です。

そういう時にアートにふれると、脳の「デフォルトモードネットワーク」がよく働き、よい着想も得られそうです。まだ空気がキリリとしている早春のうちにアートな時間をもつ。4月からの初動により収穫があるのではないのでしょうか。

2月4日(金)立春 晴

今日は立春、大阪は朝からよく晴れ、春が立つそのままの陽ざし。まだしばらくは寒いけど、いよいよ春がくる。

春の芽吹き －

午前中に立春のリーズレターを案内し終わりました。例年新春のごあいさつをレターに代えさせてもらっています。いよいよ新年の春が動き出す!という感じがします。

自然の流れが人間の内面の世界を動かす、それが際立つのが春の季節。仕事で出会うみなさんは自分ならではの仕事と生き方を探求する方々、いまキリリと動きだした人たちも少なくありません。

ひと事ではありますが、その心境、状況が手にとるようにわかれます。同じような経験をしてきていますから。おそらく数年後に今をふり返った時、自分史的に一つの大事な物語りをつくるものになるはず。たぶん今の段階ではそう思えないでしょうが。

年齢はちがっても、〈青春期〉のような初々しさ、みずみずしさ、旺盛な知識欲、等々。エネルギーが高い位置にあり、底力がみなぎっている。この時に吸収したものは、のちのちまで自分を生かす、そういうものです。だから気張りましょう、と声をかけるのです。

今のところまだ動き出す気がおこらなくても、むし暑くなる前の初夏ぐらいまで間は、いろいろなく〈試し〉、ちょっとした勉強により期間。よく動き、働き、遊びもいれて、新しい芽がふき、次へつながりますように。

2022年2月5日(土) 大阪城公園梅林

立春を迎え、朝の陽ざしが春めいて、寒いけど、午後に少し梅散歩。



2022年2月8日(火) 曇り

今朝は雲が多く、陽ざしは隠れ気味。風はないので、寒さはさほど堪えない。今夜は上弦の月、ちょっと望めそうにない。

— 「観察力」は先天か後天か —

「ほんとうに偉い人は時代を超えて皆同じようなことを言っている」と言った人がいます。同感です。このページでも紹介している「モンテニュ」も、1月28日付の〈話す〉で紹介した『自然は導く』の著者も、同じように「観察」の意義、意味を説いています。

個人的にも「観察」は本当に大事だと感じていて、仕事上でも機会あるごとに習慣化を勧めています。自分ならではの仕事を模索する人たちに、繰り返し話しているのです。

最初はピンとこなくても、そのうち実感するようになる。よいよ仕事を実践していこうとするなら、おのずと今の有り様をこまかく観察する必要性に迫られますから。

そういう風にして仕事への達成感を感じつつあるお一人と話す機会がありました。あれやこれやと話題がうつり、観察の大事さの話になった時、観察する意識、アンテナは天性のものではないと言われる。

人に教えられなくてもそうできる人は確かにいる。でも後天的な要素が大きいのでは？ 最初は自分で意識することが欠かせませんが、それを繰り返すうちに、自然に身につくようになる、そうではないでしょうか。

とはいえ、問題なのは、自分で意識しようと心がけるかどうか。そういう意味では、天性にそういう資質が必要ともいえます。

人の可能性にかかわる仕事をしていると、この堂々巡りの問いがついてまわります。だから、とにかく大事だと思うことは言い続けることになるし、自分もまた自他ともに観察を続けながら。

2022年2月9日(水) 中之島から東の空を望む

お昼に運動がてら、天満橋まで散歩



2022年2月10日(木) 曇→雨

まだ雨は降っていないけど、お昼前には雨のマーク、それでも夜には晴れそう。関東は大雪の予報、春本番が待ち遠しい。

。

## ー 音調、もの言いー

もともとあまり腹の立たない性格に年令もかさなり、妙にもものわかりがよくなっている自分を感じる時があります。それもあまりよくないんじゃないかと思ったりします。

とって、心が不快感に包まれるのも精神衛生上よくない。だから、これでよし、と思いつつ直すわけですが、思い返せば、自分自身の物言いが誰かを不快にしていたこともありましたが、こちらは気づいていません。そうに違いなかったと、独立してから心当たったのです。

自他ともに少し開眼し、色々な知識も増えたおかげです。その色々の中に、仕事上でもよく引用している、「音調」があります。『私の日本語雑記:(中井久夫)の中に紹介してあったことです。

「コミュニケーションは、3割が語彙、7割が音調といわれている。ある音楽家の観察によると、討論において音調が平板な人は同じ内容でも音調が豊かな人より話が通らない」。

「そんな言い方なくても…」と感じるような物言いをする人もいますが、それも「音調」の違いということでしょうね。

物言いは、やはり年を重ねると、洗練させておかないといけない。若い時は若さがカバーしますが、年をかさねると…。

個人的には「コロナ」初年の2020年に音声に目覚めたこともあり、『発声と身体のレッスン』(鴻上尚史 2012年)を流し読みしました。ちなみに、声の要素は5つ、大小、高低、速さ、「間」、音色、とのことです。

2022年2月12日(土) 知人のメールに自身がアレンジメントされたお花の写真!



022年2月14日(月) 曇→晴

今のところ曇り空だが、お昼すぎには晴れてくる予想。昨日雨が降ったわりには、さほど寒くない。週末には気温がまたぐっと下がるようだが、ひと雨ごとに暖かくなる、のもすぐ。

－ 習慣とは、なんと… －

今日のessaisでも話したとおり、昨年から読書の仕方も少し変わりました。なにせモノを増やさないことにしたので、本はおもに図書館で借りることにした。

そして一番変わった(いやいやこれから変わっていく)のは、もう何を読んでもいいと感じていることです。

自分の知り得ることなんて、ほんのわずか。だから、あとはその時々ちょっとしたきっかけで、何でも手にしてみる、それでいいのではないか。ある意味、知に謙虚になったといえるかもしれません。

わからないことばかりだけど、そのごく一部でもわかることで、自他どもの助けになる。10代の頃から読書を身近にしてくれた当時の大人たちに感謝しています、今になって。

とにかくじっくり読むことをよとしていた大人たちでした。知らずしらずその姿勢を習っていたわけですが、習慣とはおそろしいもので、拾い読みの習慣がついてしまうと、それが抜けない、という話を聞きました。

経営者の知人によると、仕事で使えそうなものを探して、ハウツー本を主に読んでいたら、いざ文芸書を読もうとすると、その根気がいつの間にかなくなっている自分に気がついたと言うのです。

以前に買ってあった好きな作家の本なのに、物語りがまどろっこしく感じて、飛ばして読んでしまいたくなくなったんだとか。なんと、まあ。

それでも自分で気づいているからいいじゃないですかと返しましたが、「あと何年本を読めるかと思っているのに、まさか、こんな風に自分になっているとは…」とおっしゃる。

人生の質は習慣によってきまると個人的に感じていますが、よくもわるくも、習慣とは本当にすごいもの、おそろしいものです。

何を読んでもいい、と感じているわたし自身の今後の読書の習慣が妙なものにならないようにしなければと思う直近のエピソードでした。

2022年2月15日(火) 奈良の橿原へ

発掘から50周年を記念した特別展、これは行かなければ!と出かけてきました。





奈良でしか販売されない記念切手を、郵便局を探してget!

**高松塚古墳壁画  
発見五十周年記念**

陶彩色壁画の発見から半世紀  
掘られた飛鳥の日は  
三〇〇年変わらない飛鳥の姿を見つめています。

**郵便局オリジナルフレーム切手シート  
高松塚古墳壁画発見五十周年記念**

**高松塚古墳とは**

高松塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字平田に所在する7世紀末から8世紀初頭にかけて造られた古墳です。古墳の頂上に松の木があったことから、高松山と呼ばれていた江戸時代の記録があります。直径23m円墳で、二上山凝灰岩の切石を組み合わせた石室が納められており、石室内からは漆塗木棺の破片や海獣骨彫像、福金具等の遺物が出土しました。

**主な出土品**

**発見の感動**

1972年3月21日、高松塚古墳の石室内の様子が明らかとなり、陶彩色の壁画が描かれていることが明らかとなりました。この発見は「世紀の発見」として、文化財関連で初の全国紙第一面のカラー写真記事として取り上げられました。この発見をきっかけとして、全国で考古学ブーム・飛鳥ブームが巻き起こり、同時に文化財保護や飛鳥保存の重要性が叫ばれることとなりました。

**深化する研究**

高松塚古墳が発見されて以降、終末期古墳の認識が広まりました。東アジアとの比較研究や美術史学からのアプローチなど、従来にはない多様な分野からの研究が実施されるようになりました。技術の進歩と併せて、科学的な手法も取り入れた多角的な研究を進める契機となりました。

**未来への継承**

約1300年前から現代まで伝えられてきた高松塚古墳壁画の歴史的使命は世界的にも非常に高いものといわれています。明日香村に在りつづけた壁画の発掘・保存・修復等に携わっていただいた関係者、そして明日香を愛する多くの方々の協力により守られてきた貴重な壁画を、未来へと継承していかなければなりません。

**高松塚古墳壁画発見50周年関連イベントの情報を公開中!**

2022年(令和4年)11月開催予定  
講演会・観覧会等のイベントを実施します。 [イベント 50周年](#) [検索](#)

日本書紀編纂のとき  
 奈良県・高松塚古墳の発掘と修復の歴史を伝える  
 奈良県立歴史博物館  
 高松塚古墳の発掘と修復の歴史を伝える  
 高松塚古墳の発掘と修復の歴史を伝える

84 NIPPON

84 NIPPON



2022年2月18日(金) 晴

また寒くなったけど、昨日よりはまし。カレンダーをみれば、明日は「雨水」、雪の季節も終わり、ひと雨ごとに春本番に近づく節目。

－ 『エッセー』の主題 －

『モンテーニュ』(荒木昭太郎2000年)を読んで時、今の時代と一緒に生きて、後進を励ましている、そんな感じがしました。モンテーニュは1533年生まれた人ですが。

それほど普遍的な主題について自問自答を重ねた人だということでしょう。全3巻にわたって、「方法と結果」、「悲しみについて」、「良心について」等々、『エッセー』が今も生き続ける理由がよくわかります。

今日からの〈話す〉では、わたし自身の思考の結果の一端をお伝えすることにしました。一方〈書く〉では思考の試しを発展させるようにすると、よい頭の体操にもなりそうです。

ちなみに『エッセー』の第1巻は57章にわたっています。最後の57章目はなんと、「年令について」です。執筆は1572年に開始したそうですから、モンテーニュ39歳の時です。

新版、増補をかさね1588年に完結したので、55歳になっています。16年かけて書きまとめ、60才を手前にした1592年にこの世を去ったモンテーニュ。

自分の試しに呼応して、思考の試し・表現の試みをしている誰かが未来にいるだろうことを想像しながら、『エッセー』は書かれたと思います。モンテーニュにならない、そうしていこうとあらためて想う昨日今日です。

2022年2月21日(月) 晴

昨夕から夜にかけて少し雨が降った。そのおかげで空の青さが冴える。まだ冬の寒さだけど、この週末からは暖くなるよう。まもなく3月

－ 会話・対話について －

今日のessaisで話したことに続けて、書こうと思います。会話・対話の一般的なあり様、〈常態〉を知った時は、自分のズレを感じたものです。

“ということは、けっこう嫌われていたのっかもしれないなあ…”。こちらは礼儀のつもりでハッキリ意見を言っているのに、先方にはぶしつけな人と感じられた可能性が高いわけですから。

意見が違っていたら、当然また言ってくれるものを無意識に考えていたので、これはまさに大変なコミュニケーションギャップ。

ただし、しばらくして気づきました、たぶん利点の方が大きいのではないか。というのも、自分の考えをある程度ははっきりさせるので、こちらを品定めする材料を提供することになります。

よって、合わないと感じた人はこちらに近づかない。人間関係ができるまでには発展しない。ほとんどの人とは基本線はわかった上で付き合うようになるので、その後のトラブルがあまりない。

つまり人間関係でのストレスがあまりない、ということです。今でも離職理由のトップは「人間関係」だろうと思いますが、そのストレスが少ないのは、心身のエネルギーを負のことに消耗せずに済むということ。

これは大きい。そして何より、互いの意見や考えを交換し合えるというのは、異質な知に触れるということでもあるので、精神的なエネルギーを補給することにもなる。

自分の意見や考えを話す、語る。それが自分の人生を彩る人との出会いにつながり、自分を生きることにつながると思うのですが、でも、中々できにくいといいます。どうしてでしょうね、さらに考えるとします。

2022年2月23日(水) 晴⇄曇

全体的に雲がかかって、すっきりとは晴れず、今日も寒い。週末なかの祝日、電車は空いているし、ビルは静かだし、こういう時に出て、ひと

－ 「話す」と生産性 －

時々ニュースになる、国際比較での日本の生産性の低さ。算出方法の違いなど、順位については単純に鵜呑みすることはできないようですが、低位置は変わらないようです。

その理由の深いところに、「声に出す」、「話す」が、あるのではないかと、そう考えています。大きなニュースになる組織の不祥事や不正、虚偽から、小さなトラブルやミスなどの、底の底に、日本的なコミュニケーションの有り様があると言ったら、おかしいでしょうか。

かの「〇〇細胞」の問題の時に思ったものです、たぶん同じ施設の他の研究者の中にはヘンと気づいていた人は少なくなかったのではないかと。もっともっと前の段階でうすうす感じていたはずではないか。

でも口には出さない。そこには組織内の複雑な関係、パワーバランスも働いているでしょう。

そこまで大きな問題でなくても、ごくごく身近な仕事の現場でも、言い出しっぺになると、自分がやらないといけないからと、あえて口には出さないという人もいますね、自分の仕事にも関わってくるのに。

組織の中に非正規雇用の人が増えたことも、輪をかけました。余計なことは言わずに決められたことだけをするのが一般、そうでない人も、問題点を上司に言うと、「君はそんなことを考えなくていい」と言われて、出しゃばらないようにしたと言う人もいました。

パワーバランスに関わるようなことはそうそう言えなくても、日々の仕事のことで、それはちょっとマズイということは、やはり口に出す、話すことが必要でしょう。

嫌な顔をされることもあるでしょうが、それは相手の度量の狭さ。それを気にして、当然想定されるミスをそのままにしているのは、たしかに生産性は低くなる。そう考えるのですが、いかがでしょう。

思い起こせば、会社員時代に社長に面会を申し込んだり、独立してからは所属するグループの建前だけの例会にももの申して、少し波紋を起こしてきましたが、確実に問題の緩和になりました。

やはり誰かが言い出しっぺにならないとダメですよ。

2022年2月27日(日) 曇→晴

朝は曇っていたが、そのうち徐々に晴れて、絶好のマラソン日和になったのではないかな。今日は大阪マラソン、夕方になり、ヘリコプターの音も

－ 「話す」バランス －

今からすると誰も想像できないようですが、10代の後半から20代初めにかけて、本当に無口でした。そうしようとしてそうになっているのではなく、自然にそうになっていたのです。

無口すぎて、かえって目立ったようでした。こちらは知らない先輩なのに、相手はこちらを知っていると、自分の知らないところで噂されていたとか。たしかに逆の立場だったらちょっと気になる存在でしょう。

無口でも考えていないわけではないので、イザという時には発言する。つまり、“それはおかしいでしょ”というような場面です。当然、俗にいう「理路整然と」という感で話すことになります。

実際にあった場面をいま思い出しながら書いていますが、皆の顔が昨日のここのように浮かんできます。一瞬、ギョツとしたような、目を瞠るような、珍しいものでも視るような…。

こちらは当然のことを言っているわけで、内容的には皆も納得するものですが、この後の反応が、おもしろい、というか、想定外。こちらからすれば、ズレています。

こんなに無口な人が口を出すのだから、よほど腹を立てているに違いない、なんとかしなければと、皆で相談して、後日あらためて代表の2名が釈明に現れた。こちらは、ポカン。

まさにコミュニケーションギャップです。ただ、彼らがこうしてやってきてくれたので、まったくそんなことがないことを伝えられた。まずはギャップは解かれたわけです。結果、少し親近感が増したようでした。

何ごともバランスが大事ですが、「話す」についても同じ。まだまだ考えさせられることがたくさんありますね。

2022年2月28日(月) 大阪城公園

東税務署へ行った帰りに、大阪城公園へ。梅林を上から眺めて春到来にひたりました。

